

文学作品における作者の空間理解を表現する建築空間の探究^{注1)}

—国木田独歩の『武蔵野』を題材として—

日大生産工(院) ○井手 優汰
日大生産工 篠崎 健一
東京工業大学 藤井 晴行

1 はじめに

筆者は国木田独歩の文学作品『武蔵野』より作者が作品中に描写する空間体験の記述から、作者と環境の関わり方を身体的な図式を用いて空間図式を図示し、作者による武蔵野の空間理解を解釈している。本研究は文学、建築空間と、環境により創生する建築空間が、空間の体験者が『武蔵野』の作者の経験を実感する空間となることを試みる。その作者の経験を建築空間へ解釈する具体的なプロセスについて議論する。

2 国木田独歩と『武蔵野』

『武蔵野』は国木田独歩が当時（明治 30 年頃）の武蔵野に暮らす自身の生活において体験した『武蔵野』の風景を描写している。日本文学の伝統に捉われない、作者自身の生の体験を叙景文として表現する情景の美に、詩人であった作者の豊かな感性が色濃く反映している。^{注 2)}

2 作者の空間理解の解釈

『武蔵野』の文中から作者自身がその場所で体験した空間と自身との関係について描写している文を抜粋する。Lakoff²⁾が Johnson との共同研究にて提案した運動感覚的イメージスキーマという概念(表1)を基本単位とし、福田ら³⁾の図示した図式表現(図1)と具体性を補う表現(図2)を組み合わせ、各場面の空間図式を作成する。運動感覚的イメージスキーマは、主体と環境を関係づける身体的な経験に直接結びつけて構造を示す概念である。空間図式作成の例を右に示す(図3)。筆者は39の空間図式を図式表現している。

39 の空間図式の中で、1) 対象が動かず、主体が動く場合、2) 対象、主体ともに動かないが主体の空間の見方が変わる場合、3) 対象が動き、主体が動かない場合、の表現を分け、体験の連続性がわかるよう複合化した空間図式を図示した。本稿ではこれらの空間図式から生成した建築的空間を表現する設計基盤 A01-A10(図 4)を用いて設計を行う。複合化した空間図式は複数の表現で図示されているため、各表現を[基礎資料番号 a, 基礎資料番号 b, 基礎資料番号 c, …]とそれぞれ順に表す。例えば A01 は 2 つの表現が複合し、空間図式全体が図示されているため、

表 1 運動感覚的イメージスキーマの概説²⁾³⁾

《容器》のスキーマ	《中心 / 周縁》のスキーマ	《部分 / 全体》のスキーマ
《容器》のスキーマは、内部・境界・外部を要素として持ち、身体を容器として経験していることから理解できる。	《中心 / 周縁》のスキーマは、実体・中心・周縁を要素として持ち、自分の身体を中心、周縁として経験していることから理解できる。	《部分 / 全体》のスキーマは、全体・諸部分・形態を要素として持ち、身体を手足などの部分とった全体として経験していることから理解できる。
《起点・経路 / 目標》のスキーマ	《連結》のスキーマ	《上 / 下》・《前 / 後》のスキーマ
《起点・経路 / 目標》のスキーマは、起点・経路・目標・方向を要素として持ち、自身が移動するとき、出発する地点、目的地を結ぶ地点、それらを結ぶ場所の連なり、方向があることを身体で経験していることから理解できる。	《連結》のスキーマは、実体と結ぶ連結物を要素として持ち、母子がへその緒で連結している経験から理解できる。	《上 / 下》のスキーマは、上・下の要素を持ち、身体を動かす時に下向きに重力を受ける経験から理解できる。《前 / 後》のスキーマは、前・後の要素を持ち、目が前向きにある経験から理解できる。

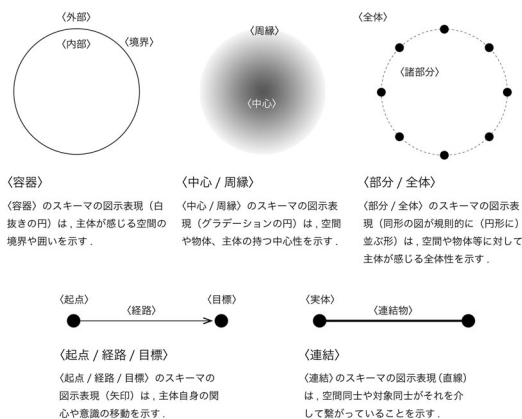


図 1 福田らによる運動感覚的イメージスキーマの図示表現とその読み方³⁾



図 2 筆者が作成した具体性を補う図示表現

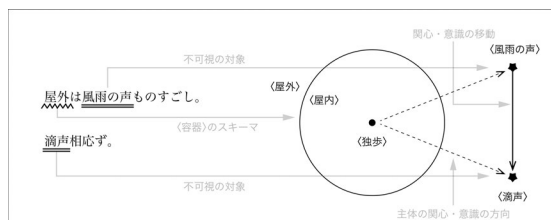


図 3 図示表現の例「野外は風雨の声ものすごし。滴声相應ず。」

それぞれ[A01a, A01b]とする。時間的、空間的長さを
もつ建築空間を設計することにおいて、上記の空間
図式は作者の空間体験の時間の経過による変化
を表しており、作者の空間理解を解釈できると考える。

3 経験の表現の構造化

3. 1 建築的空間表現への変換

2 で生成した空間図式を、建築的空間に変換する。
空間図式の図示表現に注目し、建築的空間への変換
ルールを作成した(表 2)。例えば、〈容器〉のスキーマ
の図示表現の内部に主体がいる空間図式の場合、主体
のいる正方形の床面の四方に柱を立て、床面と同面積
の水平面を屋根とすることで、〈容器〉のスキーマを
建築的空間に変換する。この例にならい、規則を作成
した。ただし、新たな空間図式の解釈を行った場合、
新たな規則が出てくる可能性がある。

表 2 空間図式と建築空間の対応関係の規則

空間図式の特徴	建築的空間での表現
1 つの場面における主体の関心・意識する対象の数	空間図式における主体の対象の数 0-1、2-3、4-6、7-12 をそれぞれ、主体の位置の床面として、正方形を基本単位とした床面の大きさ 9000mm×9000mm、7000mm×7000mm、5000mm×5000mm、3000mm×3000mm と対応づける。フィールドの環境に対象への関心・意識の方向を向けるため、床面積が狭いほど、外部の環境への視野が広くなり、対象を多く近くすると解釈している。
〈容器〉のスキーマの図示表現	正方形の床面の四方に柱を立て、床面と同面積の水平面を屋根とする。上部に床面と同形の面、四方に柱を設けることで、それらがつくる内部が容器になるとして解釈している。
〈中心/周縁〉のスキーマの図示表現	主体の位置の床面の周囲に隣り合った床面を設け、境界に壁面、柱を設けない。主体のいる床面に境界のない床面が連続することで、主体からの周囲の距離を感じると解釈している。
移動の矢印	建築空間における動線とする。主体の移動は建築空間における動線と解釈している。対象の移動は、建築空間を動く人を対象として、同様に動線と解釈している。
対象への関心・意識	対象方向へ床面と同形の壁面をつくり、壁面の中央に壁面の 1/3 の幅の開口をつくる。これらが動線とならない場合、高さ 1000mm の腰壁、及び垂れ壁をつくる。開口より見える外部は体験者の関心を引く対象となると解釈している。
対象としての光の図示表現、明らかに上部にあると考えられる対象への関心・意識	屋根がある場合のみ、正方形の屋根中央に屋根の 1/3 の大きさの開口をつくる。開口より見える外部、及びその採光は、体験者の上部への関心を引く対象になると解釈している。

それら規則を基に、複合化した空間図式における認識の移り変わりの表現に注目し、作者の空間理解の特徴を建築的空間に表現する。例として設計基盤 A03 を建築的空間に置き換える。A03 は 2 つの表現を複合化した空間図式であり、主体の位置となる床面(以降、領域と呼ぶ)は 2 つある。規則に従って、2 つの主領域の大きさ、屋根の有無を決定する。ここで A03 の特徴は「境界を越える意識とともに、容器内部に入ること、関心、意識の対象を内部にもつ」ことであり、屋根を持つ主領域の内外の境界を壁によりはっきりさせることで、外部から内部にいたる際の視界の変化が内部への意識を高めると解釈している。この例にならい、すべての 10 の空間図式の図示表現を建築的空間に対応させ、それら設計単位 C01-C10(図 4)を、最終建築空間創生の基盤とする。

3. 2 狭山丘陵と『武蔵野』

本研究の共創による創生のフィールドとして選択した狭山丘陵は、関東平野西方、埼玉県と東京都の都

県境にある丘陵地である。古くから里山として人々と生活を共にしてきた雑木林が広がっている。自然と住宅地の間には多くの谷戸が存在し、それぞれの環境を緩やかにつないでおり、そこには武蔵野の面影が今なお残っている。

具体的な、設計の敷地としては、『武蔵野』に描かれる季節の変化や移動での敏感な環境の変化を感じ取ることのできる場所として、宮野入谷戸の自然散策路の一部を選択する。これは、第一筆者が幼少期より付近に暮らし、慣れ親しんでいた里山である。(図 5)

3. 3 建築空間の設計

得られた建築的空間を設計場所であるフィールドに定位する。その際、空間図式における作者の実感が建築空間のつくる環境と対応するよう注意し、建築的空間を自然散策路の一部として道が連続するよう著者が試行錯誤を繰り返し、設計する。それらの過程を図 5 に示す。

4 終わりに

本稿において、国木田独歩『武蔵野』を題材とし、文学作品における作者の空間理解を表現する建築空間の設計過程を示した。

謝辞

本稿は空間図式研究会の研究を基盤の上に行っている。関係者に謝意を表す。

注釈

注 1) 本稿は、共創学会第一回年次会研究発表口頭発表講演梗概(2017)を抜粋し、第 50 回日本大学生産工学部学術講演会口頭発表用梗概にまとめたものである。

注 2) 『武蔵野』の作品概要は以下に記す。

『武蔵野』は浪漫的抒情主義時代の国木田独歩の代表作とされている。当時渋谷村に暮らしていた中で、作者はワーズワースらの影響により和歌で歌われる桜や柳、松などの代わりに、自ら武蔵野を散策し、季節ごとに移り変わっていく落葉樹林などの情景の趣を歌っている。作者が自然詩人であった影響から詩的特徴が多く見受けられる本作品は自身も『欺かざるの記』において「われは神の詩人たるべし。われは詩人たるべく今日まで独修し来れり。われは自己の道を歩むべし。われは詩人として運命づけられしことを確信す。全力を此の天職に注ぐべし。……吾は此の運命を満足す。『武蔵野』はわが詩の一なり。」と述べているほどである。

参考文献

1) 国木田独歩、武蔵野、岩波文庫(1939)、pp. 5-32
2) George Lakoff、認知意味論、紀伊國屋書店(2016)、pp. 314-369
3) 福田隼登、藤井晴行：空間体験に基づいた心地よいシークエンスの身体的な図式の表現方法に関する研究、日本建築学会計画系論文集 724(2016)、pp. 1281-1290

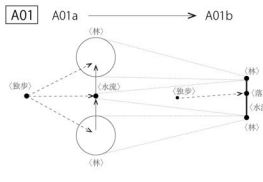
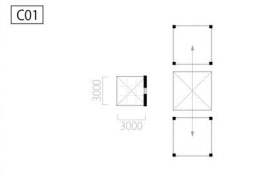
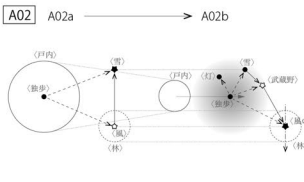
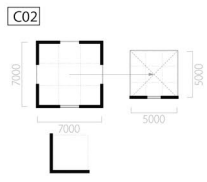
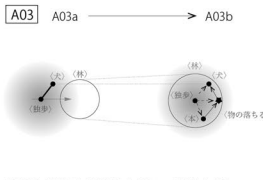
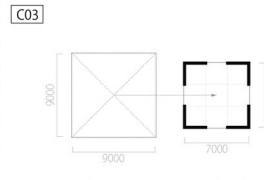
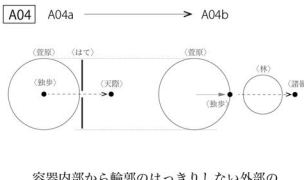
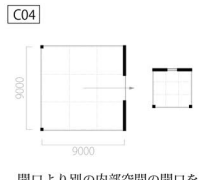
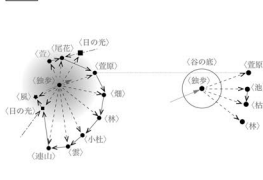
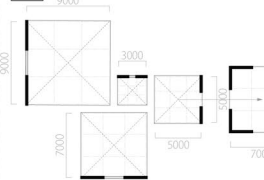
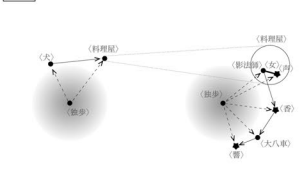
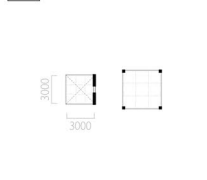
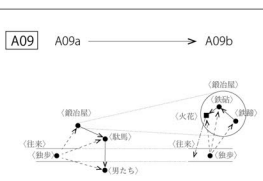
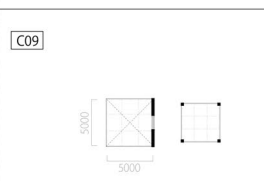
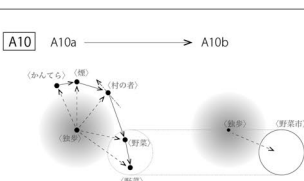
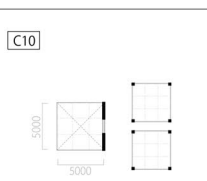
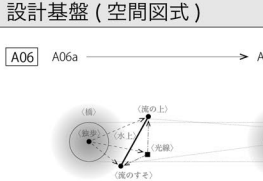
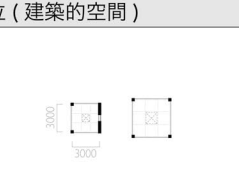
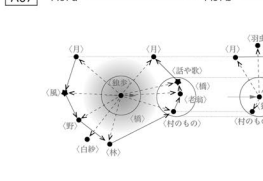
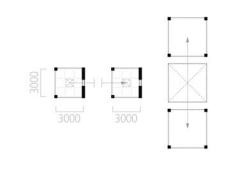
設計基盤 (空間図式)	設計単位 (建築的空間)	設計基盤 (空間図式)	設計単位 (建築的空間)
A01 A01a → A01b  それぞれ対象だったものが一つの連続する対象として知覚し、そこに新たな対象を知覚する。	C01  それぞれ異なる建築的空間の動線の連続を関心・意識の対象とする建築的空間	A02 A02a → A02b  容器内部で外部にある関心・意識をしている輪郭のはっきりしない対象を容器外部で主体との距離とともに、はっきりと知覚する。	C02  開口より同様と対象を知覚するが知覚手段がそれぞれ異なる空間
A03 A03a → A03b  境界を越える意識とともに、容器内部に入ること、関心・意識を内部の対象にのみ持つ。	C03  外部から内部にいたる視界の変化が内部への関心・意識を強くするシーケンス空間	A04 A04a → A04b  容器内部から輪郭のはっきりしない外部の対象を知覚し、境界付近まで移動したところで別の対象を知覚する。	C04  開口より別の内部空間の開口を通して対象が見える空間
A05 A05a → A05b  対象を近くから遠くへ主体からの距離とともに知覚していく、容器内部に入ると外部の対象に対して、距離を知覚しない。	C05  開口との距離が不均一な外部空間から均一な内部空間へと変化するシーケンス空間	A08 A08a → A08b  対象とから容器に認識が変わり、その内部に新たな対象を知覚する。	C08  開口より、内部が見える空間を対象とできる空間
A09 A09a → A09b  対象から容器に認識が変わり、その内部に新たな対象を知覚する。	C09  開口より、内部が見える空間を対象とできる空間	A10 A10a → A10b  対象に共通を見いだし、対象の集まりを全体として知覚する。	C10  開口より、ある点で共通する建築的空間が隣り合っているのが見える空間
設計基盤 (空間図式)	設計単位 (建築的空間)		
A06 A06a → A06b → A06c  ある対象の他の対象や光との関係とその影響を知覚する。	C06  上部開口があり、壁面開口より上部開口のある建築的空間の内部が見える空間		
A07 A07a → A07b → A07c → A07d  容器外部にある別の容器内部の対象に特に関心・意識の方向に向け、知覚する。	C07  上部に開口があり、壁面開口より見える建築的空間の内部を対象とする空間		
	それぞれ対象だったものが一つの連続する対象として知覚し、そこに新たな対象を知覚する。		
	上部に開口があり、それぞれ異なる建築的空間の動線の連続に関心・意識の対象とする建築的空間		

図 4 複合化した空間図式と建築的空間表現

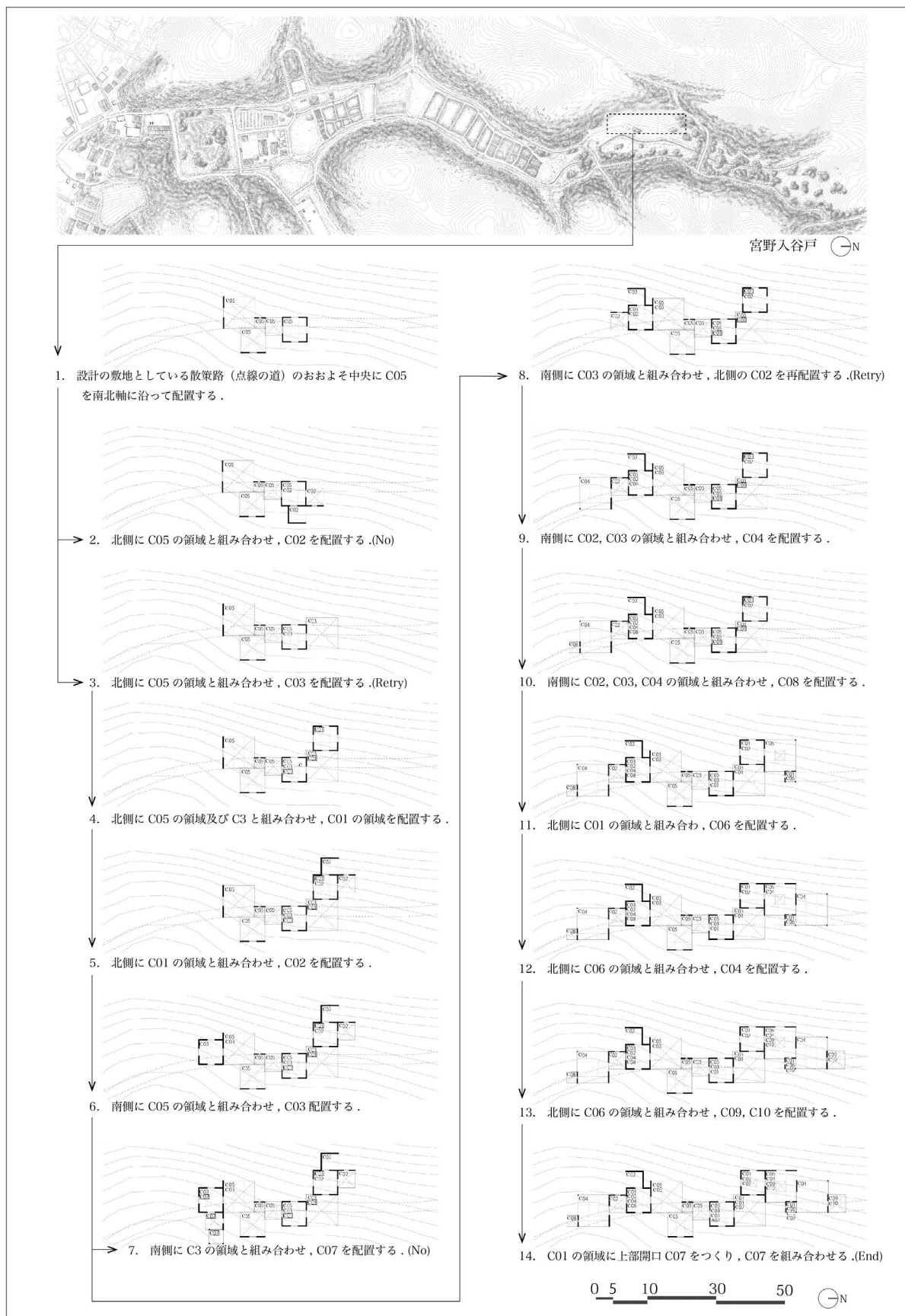


図 5 建築敷空間をフィールドに定位する設計過程